

中山義秀全集

第七卷



戰國史記

臺上の月

咲庵

芭蕉庵桃青

新潮社版

中山義秀全集

第七卷

新潮社版



© Tetsuya Akada, Reiko Yamamoto and
Himeko Nakayama, 1972, Printed in Japan.

中山義秀全集 第七卷

發行 昭和四十七年二月十日
セット版 昭和五十一年八月三十日

セット定價 二七〇〇〇圓

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一、電話
業務東京二六六一五一、編輯
集二六六一五四一一、郵便番號
一六二、振替東京四一八〇八

印刷所 塚田印刷株式會社

製本所 神田加藤製本

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信係宛御送付下さい。送料小社負
擔にてお取替へいたします。

中山義秀全集第七卷 目次

戰國史記

五

臺上の月

一〇七

咲庵

二五九

芭蕉庵桃青

三六八

*

解説

淺見 淵 五七

解題

五七七

中山義秀全集 第七卷

戰國史記

——齋藤道三——

一

大永六年（一五二六）の初春である。

正月もなかば過ぎた時分、長良川のほとり稻葉山の南麓にある法華寺、鷺林山常在寺へ一人の旅侍が訪れてきた。

年の頃は三十三、四歳、頭のつきだした平顔で、額が廣く眉長く、兩眼が深くくぼんでゐる。肥つてはゐないが、骨組みはがつしりとしてゐて、かなり身丈がある。

取次にあはれた小坊主にむかつて、蓑、笠をとりながら、

「南陽坊どのは、御在宅かな」

在否にかかはらず、あがりこむつもりとみえ、旅装をたく手を休めない。小坊主は頭を横にふり、

「さやうな人は、當寺院には居りませぬ」

旅侍は不興氣な相手の顔に、微笑をもらしながら、

「居られぬことがあるものか。此處の御住職だぞ」

小坊主は、急にあわてて、

「あ、お上人さまであられますか。して貴方さまは、どんな様でござりませう」

「法蓮坊がたづねて來たといへば、すぐにわかるはずだ」

「左様でござりますか。少々お待ちを願ひます」

小坊主は相手の武士姿と僧名の名のりを、ふしぎに思つたらしく、首をふりながら奥へひつこんで行つたが、暫らくするとこんどは庫裏のほうから、足すすぎの湯盥をかかへて駆けだしてきた。

「さきほどは、御無禮をつかまつりました。上人さまがお待ちかねであります。お足をお洗ひ致しますせう」

さういふ後から前髪立の喝食（寺小姓）達が現れてきて、客の脚絆や伊賀袴をとく手傳ひをする。

寺院の中は、かなり廣かつた。離れの方丈へ通じる渡廊下の入口に、住職が出迎へにきてゐたが、客の姿を見るなり顔をほころばして、

「やア、法蓮坊、よくぞ見えられた」

客も笑ひながら、

「十年ぶりぢやな。すつかりもう、名僧知識の體にみえるぞ」

「會ふ早々、ひやかすのはおけ。さア、あちらへ參らう」

住持の居室は書院造りで、中に爐がきつてあり、湯釜がたぎつてゐた。客は爐の炭火に、手をかざして、

「京にくらべると、こちらは暖いやうだな」

「庭の梅が、ほころびかけてゐる。しかし、加賀の白山、木曾の御嶽、恵那の山々の雪を見たか」

「見たとも見たとも。垂井の宿からこつち、ずうつと見通した。氷の屏風を、天空にひきまはしたやうで、いや見事なものぢやつたわい」

住持は手づから、茶をたてながら、

「里には春色がたちそめたが、山國はこれからが大變ぢやとくに法蓮坊、その姿はまた、どうしたことだ」

住持はたてた茶を客にすすめて、相手の姿を見直してゐる。

「ははは、これか」

客は頭の茶筌髪に手をやり、

「坊主がいやで商人になつたが、それにも飽きがきて、こんどは鎧冑で暴れまはりたくなつてきた」

「お身の父御は、もと北面の武士、蛙の子が蛙になつたやうなものであらう」

「しかし南陽坊、まだ井の中の蛙ぢや。御坊の力で、世の中に出示してくれ」

「それで、訪ねてきたか」

「美濃は國の中原ちゅうげんとも云はれる、上國ぢやからな」

「心得た。お身ほどの才覚があれば、志をのべるに手間はいるまい。いや、新年早々恐ろしい人物が、舞ひこんできたものぢやて、はははははは」

二人はひどく、親しげな口の利きかたをしてゐる。まるで、以前の長い、舊知の間柄でもあるやうだ。しかも互に心の中で、相ゆるしあつてゐるところがあるやうである。身の上を頼みこむ方も、またそれを引受ける側も、一語をもつて談笑の間に事をすましてゐる。

「ともあれ、一別以來ぢや。一獻くまうか。春めいてきたとはいへ、まだ極寒の季節、道中さぞ凍えたことであらう」

住持は客をいたはるやうに、喝食に命じて酒肴を運ばせる。

「長良は、鮎が名物だが、今はない。そのうるかでも、肴にされたがよい」

客は膳部の盃をとりあげて、

「では、遠慮なく、頂戴しますぞ」

住持も客の相手をつとめながら、

「私が京の妙覺寺から、此處へよばれてきたのが永正十三年（一五一六）。かれこれ十年ほどになる。お身もその後間もなく、寺を出られたと聞いたが……」

「されば、儂も朋友の御坊に去られて以來、寺内ぐらしが
とんと詰らなくなり、縁あつたを幸ひ、奈良屋に養子にま
ゐつた」

「奈良屋といへば、荏胡麻の燈油を一手に賣りさばく京隨
一の大座元。このあたりでも、店の品をみなつかつてゐる。
そこをなんで、飛びだしてきたのぢや」

「さきも云ふとほり、商人は儂の肌にあはぬ。それに武家
が威張つてゐて、何かといへば徳政なぞをふりまはし、借
錢や質物を踏みたふさうとする。亂世のことなれば致しか
たがないやうなものの、痛めつけられる身になつてみい。
好い加減、商人がいやになつてしまふぞ」

「そこで今度は武士になり、威張りちらさうといふのぢや
な」

「あはははははは、まアそんなところだが、儂も世に生れ
てきたからは、あまり人の下風に立ちたうはないわい」

「お身の氣性としては、さもあらう。寺にをつた時分も、
經を讀みお題目をとなへるより、兵書に眼をさらし武藝わ
さに耽るはうが、好きだつたやうだな」

「儂は父が妾の子ぢやで、十一歳の時分、むりに寺に入れ
られたのぢや。そのかはり、讀み書きは、一通りできるや
うになつたから、さしひき損はなかつたやうなものだ」

「一通りふた通りの修學ではなかつたぞ。深夜もいねずに

努めてゐるのを見て、これは大志のある男ぢやと考へてゐ
た。奈良屋へ養子にまゐつても、人に劣らず研修に勵んだ
に違ひあるまい」

「いや、商賣の合間合間、こんどは曲舞、亂舞、または茶
の湯などの遊藝に身を入れた」

「奈良屋は豪商なれば、好きなことができたであらう」

「白拍子、遊女、傀儡の類まで、あさつてみたわい。御坊
と違つて、儂はねつかからの破戒僧ぢや。御坊の前だが、生
きてゐる間、やれるだけの事をやつてみて、塵外にあそぶ
のは、老境に入つてからでも、遅くはないと思つてゐる」
「ははははは、慾深い望みだが、それも出来る人と出來な
い者がある。お身がそれを望むのは、それに相應する器
量を、持つてゐるからぢや。私のやうな心弱い者にとつて
は、むしろ羨しく覺ゆる」

「名僧知識となるのも、心弱うては叶ふまい。御坊はさう
ではなうて、賢いのぢや。御坊の眼からすればこの世はお
ろか、黄泉までも明るう見はるかされるであらうが、儂は
闇路に迷ふかぎり迷はなければ、五慾を截斷することはお
ぼつかない」

「お身にも似あはぬ、殊勝なことを云はれる。妙覺寺で修
業中、お身は私の兄弟子ぢやつた。その法弟にむかひ、何
事も承知でさやうなことを申すのは、他に能なき貧僧を、

憐れんのでことであらう。成功のあかつきは、寺領でもたと寄進して下され」

「ははははは、是非さうありたいものだが、これからいろいろと御坊の世話にあづかる身で、大言も吐けまい。時に兄者人は、堅固でわたらせられるか」

「この先、南一里の加納の城に、息災で暮してゐる」

「數年前の騒動は、その後すっかりをさまつたのぢやな」

「明應の騒ぎを、そつくりその儘繰返したやうなものだから、互に反省したのであらう。それに守護の殿も先年亡くなり、今は當主の代になつたから、いざこざの種子も消えたわけぢや」

「それは目出たい。隣國尾張に織田信秀が興り、江北小谷の城に淺井亮政が、新しく勢力を張りだしてゐる折柄だから、内訌に日をおくつてゐる場合ではあるまい」

「まつたくぢや。しかし、明應三年につづく五年の二度の内亂で、土岐家の鋒先もだいぶ衰へてきたやうだな。それに當主が我儘者で、群臣の押へがきかない。守護代が割合しつかりしてゐるから、いいやうなものだが……」

「御當家は、源賴光公以來の古いお家柄だ。元弘、建武の頃から繁昌して、今ではおしもおされもせぬ、美濃一國のお屋形。執權に齋藤あり、宿老に稻葉、氏家、伊賀の三人衆あり、加ふるに土地の富饒は、他國の遠くおよぶところ

ではない。まづは萬代不易と、ことほいでよからう」

「さう祝つてくれれば、有難いやうなものだが、東西の公方家に昔日の威力がなく、三管領のうち斯波武衛家がまづ没落して、越前の朝倉がこれにかはり、四職の京極も衰へて、淺井と交替した世の移り變りを見ると、舊家といつて安心がならぬ。お身のやうな器量人が、幕下に一人でも多く増えてくれれば、それだけ心強い。近々加納の城へ出て、お身を兄にひきあはせよう」

二人は土岐の將來を語つて、倦むことを知らないものやうである。

二

客の旅侍は京の西郊西岡の人、松波庄五郎、後の齋藤道三である。松永彈正も同じ西岡の人であるから、戰國時代の梟雄二人が、相前後して同じ土地から輩出したわけだ。道三の方が、彈正より先輩にあたる。

彈正は商人の子だが、道三は禁裏北面の武士、松波左近將監藤原基宗の庶子である。童名を峰丸といふ。十一歳の時、京の日蓮宗妙覺寺に入つて、法蓮坊を名のつた。

成年後還俗して奈良屋又兵衛の婿となり、べつに山崎屋をおこして、山崎庄五郎と云つた。奈良屋は山崎八幡宮が特權として持つてゐる、荏胡麻燈油の販賣を一手にひきう

けてゐる。

山崎屋はその分店として、おなじく燈油を諸國に賣りひさいだ。庄五郎の道三は、商賣をかねて諸國をへめぐり、眼をつけたのが美濃である。

道三が生れた年、明應三年の冬（一四九四）、土岐家にお家騒動がおこつた。當主の守護土岐美濃守成頼が、嫡男の政房をさしおいて、後室の腹にできた末子の元頼に、家を繼がせようとしたためである。

當時の土岐家の執權は、齋藤越前守利國だつた。土岐の所領美濃十八郡三十七萬餘石の中、東西にわたる中心部の五郡、およそ八萬石ほどを領知してゐた。その齋藤が家政の實權を握つてゐた長臣を、石丸玄蕃利光といつた。

つまり、土岐の實權は齋藤がにぎり、齋藤の實權は、石丸が握つてゐたといふことになる。領地の徵稅や管理その他の政務を、それぞれ家老格の者にまかせてゐたからである。

守護の成頼はこの石丸利光をたのんで、愛子元頼の擁立をはかつた。利光にはまたこれを機に、主の齋藤利國をたふし、元頼を傀儡にして、美濃十八郡を支配しようとする野心があつた。

そこで齋藤利國と石丸利光の間に戦が始まり、土岐の家中は二つに分れて争つたが、織田方の兵數千が利國方に應

援したため、明應三年七月五日利光の軍はやぶれて、元頼、利光、の主従は近江にはしり、江南の守護、六角氏をたよつた。六角高頼は、土岐成頼の女婿である。

翌々年の明應五年四月、石丸利光は再舉の兵をおこして、江南から美濃へ攻入り、五月、利國の居城、稻葉山北方の城田寺^{じでら}まで押寄せてきたが、利國の軍に包圍されて二十九日、元頼、利光は敗死してしまつた。

齋藤利國方には東の今川、南の織田、西の京極、北の朝倉の四方より、援兵をおくつてきてゐて、兵勢六、七萬にもおよんでゐたから、勝利は當然の結末だつた。これにたいし、石丸方の應援は、江南の六角と伊勢の北畠の二氏にすぎなかつた。

この年の冬、齋藤利國は子の利親とともに、江北の京極高清水をたすけて、戦勝の餘威をかり、江南の六角高頼を攻めたが、高頼の宿將蒲生貞秀にやぶられ、十二月七日、現在の米原に近い息郷^{いしきょう}の里で、利國、利親父子は戦歿した。

明應年間におこつた、土岐家中の内亂を、船田合戦といふ。石丸利光の居城が、加納と數町を隔てた船田にあつたからだ。この内訌のため、石丸利光、齋藤利國の兩權臣をうしなひ、建武中興以來の土岐家の武威は、やうやく衰へてきた。

守護の土岐成頼は、明應六年の四月に病死して、嫡子の

政房がその跡をついだが、彼の時代にまた騒動がおこつた。土岐政房は童名を、美伊法師と云つた。美童のうへに舞の上手で、九歳の頃、京都の館で曲舞を踊り、大宮人達の眼を驚かせたことが、一條兼良の「藤川記」に出てゐる。政房はもと頼綱といつたが、將軍義政から「政」の一字をもらつて、政房と改めたものである。

土岐家の執權職は、近江で父利國と共に陣歿した、齋藤利親の子勝千代がついだが、幼少のため叔父の長井藤左衛門尉利安がその輔佐にあつた。利安は利國の弟で、船田合戦の折は一軍をひきゐて、石丸主従を攻めほろぼした。彼は成人して利良と名のつた勝千代とともに、稻葉山を本城にして、山麓の長井洞の館にすんでゐる。

守護の政房には八男一女があつた。長男が太郎政頼、次男が二郎頼藝、三男三郎治頼、四男梅戸民部太夫光高、五男揖斐五郎光親、六男鷲巢六郎光敦、七男七郎頼充、八男の八郎頼香などである。

長男の政頼は粗暴な若者で、感情が強く思慮があさひ。次男の頼藝は、父ににて遊藝を好み、風流を愛してゐる。そこで政房は、頼藝に家督を譲らうとした。これが騒動のもとである。

執權の齋藤利良や輔佐の長井利安が、政頼を支持したために、政房は隠退をよぎなくされ、政頼に守護職をゆづつ

て、城田寺の館に移つた。父の成頼がここに隠退してゐたやうに、城田寺は土岐家の隠居地である。

これが永正十四年（一五一七）、冬十二月のことだ。明應三年から五年にわたる船田騒動以後、二十二年目にあたる翌十五年の秋八月十日、こんどは政房、頼藝の側が勝つて、政頼は利良と一緒に、越前の朝倉家へはしつた。朝倉孝景の父貞景は、利良の祖父利國の女婿である。

政頼、利良は幕府の催促で、翌年越前から歸り、ふたたび守護の地位についたが、かうした親子兄弟の内輪喧嘩は、國內を動搖させ、したがつて治安が保てない。表面は癒つてゐるやうに見えて、じつは内に膿をもつた腫物のやうな状態にある。

山崎庄五郎の道三が、商賣をかねて國內をめぐりながら、かういふ情勢に目をつけ、美濃にのりこんできたとすれば、常在寺の住職が云ふやうに、實に油斷のならぬ恐ろしい男である。彼は武士となると同時に、山崎の姓をすてて、父の姓松波氏にかへつた。

土岐政房は、永正十六年六月十六日に亡くなつた。それで政頼や利良が歸國してきたわけだが、政頼と頼藝兄弟の間が、父の死後これまで無事に保つてきてゐるのは、政頼の背後に利良の後見長井藤左衛門尉利安がついてゐるやうに、頼藝には利國の子長井豊後守利隆といふ支持者があつ

て、兩者の勢力が伯仲してゐるからによる。

長井利安は、齋藤利良とともに、稻葉城をまもり、長井豊後守利隆は加納城、守護の政頼は革手（川手）城にゐる。革手城は代々守護の本城で、稻葉城が執權齋藤家の據城、加納城は革手のおさへとして、執權の嫡男がすむ慣しになつてゐる。

地勢からいふと、稻葉城の南一里に加納城があり、加納の西南半里に革手城がある。

三城鼎足の形で、まん中にある加納城が、革手の政頼と稻葉の利良、利安の連絡を、おさへてゐるやうな位置をしてみてもゐた。

兄の政頼と對立してゐる土岐頼藝は、長良川の對岸鷲山城にゐた。鷲山は稻葉の北一里餘のところ、そのすぐ北に城田寺がある。

常在寺の住職は、頼藝の後押し長井豊後守利隆の弟である。京都の妙覺寺にゐた時は、南陽坊といひ、道三の法弟で、彼より二歳下である。今は日運上人とよばれ、常在寺四世の住職となつてゐる。

松波庄五郎は燈油を諸城下にひさぎながら、土岐家の内情をさぐり、諸豪族の動向を調べたうへで、昔の法弟だった日運をたづねてきた。日運の手引きで兄の利隆にちかづき、さらに土岐一族にとり入らうとするのが彼の目的だ。

日運の兄の長井利隆は、思慮にとんだ人物である。土岐家の執權職を、甥の利良や叔父の利安にまかせて、あへて彼等と争はうとはしない。それで土岐の家中が、平靜に治つてゐる。

長井利安や利隆が、齋藤一族でありながら、長井の姓を名のつてゐるには由來がある。齋藤家は藤原氏の裔で、承久二年（一二二〇）の四月以來、美濃國司の施政を代行する目代をつとめてゐた。官は左衛門尉である。それで國司の政令文書には、代々左衛門尉と署名する。

南北朝の頃、土岐頼康が美濃、尾張、伊勢の守護に任ぜられ、目代の齋藤利康はその家臣となつた。この利康の母が大江氏、長井左近將監貞廣の娘で、このゆかりから嫡流のほかは長井姓を名のるやうになつた。

齋藤家は土岐氏や執權の北條氏とも縁をむすんだ、美濃の名門で、その領地は加茂、各務、厚見、方縣、本巢の五郡にわたつてゐる。いづれも中仙道に沿つた中心の要地をしめ、守護の土岐氏もその勢力を無視することができない。南陽坊の日運が、庄五郎を兄の利隆にひきあはせると聞いて、庄五郎が日運に云つた。

「舎兄の利隆殿は思慮深い人望のあるお方と聞か、どういふ事がお好きなのだ」

「兵事よりは、文學のはうだらうな。母が一條禪閣兼良公

の娘だつたから、私達兄弟は武ばつたことはあまり好まない」

「歌舞音曲のはうは、どうであらう」

「嫌ひではないが、その點では土岐頼藝殿のはうが、輪をかけて好きだ。父御政房殿の血をひいて、歌舞のわざに秀でもゐる。お身は遊藝を稽古したさうだが、頼藝殿のお氣にいらたくば、そのはうの嗜みをもつて近づくに越したことはない。ほとんど、淫すると云つてもよいくらゐだ」

「そんなに、お好きでゐられるか」

「丹後宮津の城主、一色左京太夫殿の娘二人を、妻妾にしてゐられるが、妹の深芳野の方がことにお氣にいらで、そのお方を相手に毎日遊藝三昧。まア兄者人とああいふ風に家督を争つた後だから、そのやうなことに耽つて兄の嫌疑をさけ、日を送つてゐたはうが無事であらう」

「それにしても、姉妹二人を妻妾にしてゐるといふのは、どういふ次第だらうな」

「深芳野の方は、一色殿四十二歳の厄年の子なので、頼藝殿にとつぐ姉につけられてきたのだ。厄よけのためらしい。育つてみると、ひどく美しいので、頼藝殿が寵愛した」

「そんなに、美しいか」

「美しいとも。美濃國內はもとより、京にもあれほどの美女はゐなからう」

「としは幾つぢや」

「まだはたち前、十六、七かと思はれる」

「ふむ、若いな」

庄五郎はどういふつもりか、首をふつて感心してゐる。

三

日運は松波庄五郎を、加納城へともなつて行つた。城主長井利隆は、四十四、五の年配である。互に性があふとは、をかしたものだ。利隆は一見して、庄五郎が氣に入つたらしい。舍弟日運のひきあはせにもよつたであらうが、まだ名もない處士の庄五郎と、館の奥の間でしたしく對坐して、「愚弟よりかねてお噂は承つてをりました。在京の節は、なにかとお世話にあづかつた由、よくぞ訪ねて見えられた。父御はもと北面の武士であられたとか、同じ藤原の出自とあれば、我等とまんざら、無縁の仲でもござらぬ。かやうな所でよければ、ゆつくり滞在なされたがよい」

初對面にしては、ひどく愛想がよかつた。もつとも客をもてなすのは、當時の慣しになつてゐた。諸國の話や珍しい風聞を、耳にすることが出来るからである。

しかし、利隆の態度は、そればかりではなかつたやうである。日運の推稱もあつて、尋常でない庄五郎の人格に、頼母しさと好意を感じた風であつた。

庄五郎の風貌は、異相といふやうなものではないが、たしかに或るなみなみならぬものを、人に覺えさせる。くぼんだ兩眼の奥に、つめたく沈んでゐる光は、事あればたちまち稻妻をはなち、雷雨をよびおこしさうな、一種の凄氣をひそめてゐる。

廣い額から下につきだした顎にいたるまでの間、中央に鼻筋がたかく通り、兩脇に顴骨がそびえたつて、細おもて長めの顔立だが、いづれの點にもゆるみがない。すべてがよくひき緊つて、智略と思慮に息づき、波うつてゐるやうである。

「忝けなき仰せ。他によるところなき處士の身の上、宜しくお引廻しのほどをお願ひ申上げます」

庄五郎はかみしも、袴姿である。その背を折曲げて、慇懃に挨拶した。その落着いた物腰は、三十代と思はれぬばかり老成してゐる。佛學、遊藝にかぎらず、文學、兵法、何事も一通りの修業をつんで、自信を肚に収めてゐるからであらう。

「當家は強弩の末で、謀臣に不足してござる。其許のやうな士がえられれば、當家の仕合せ。しかし、良士は良主をえらんで、仕へると申す。まづ齋藤の嫡流利良殿や、土岐の守護に目見得の上、とくと勘考致されたがよからう」

利隆のいふところも、日運と同じだ。賢さうな若者の庄

五郎が、まさか虎狼の心をもつて、乗込んできたとは思はないから、親切に彼の身の上を心配してゐる。

庄五郎は上首尾で、利隆の前をひきさがつてきた。

「兄は話がわかるが、守護代や守護は、さうはゆかぬぞ」日運が彼に注意した。

「御坊の兄者人は、めづらしく良くできた人物、御坊と同じ賢者ぢや。守護や守護代は、ずつと劣ると見えるな」

「さうではない。兄の敵對者だからぢや」

「なるほど」

「八、九年前のお家騒動は、前守護の卒去で、一應をさまつたやうなもの、往時の怨みは消えぬ。兄の身に萬一のことがあれば、頼藝殿の身の上は、風の前の燈みたいなのであらう。お身が兄のかかりうと知つて、好い顔をする筈がないではないか」

「兄者人はまた、どういふかりあひから、頼藝殿を擁護なされるのだ。頼藝殿をかついで、領内の仕置を専らにしよう、などとの野心は、つゆほども持たぬやうだが……」

「その點、兄は君子といつてもよい。頼藝殿を保護されるのは、前守護政房殿の遺託があるからぢや。また頼藝殿にしても、兄を父のやうに頼みきつてゐる。兄はそれをふりきるほど、つめたい男ではない」

「それは、儼にたいする態度でも、よくわかる。では、守

護や守護代への目見得は、よさうか」

「それは、よくあるまい。當家にとどまるつもりならば、兄の申すやうに、一度は禮をつくさなければならんと思ふ。大いにのびんとすれば、まづ屈せよちや、はははははは」
「お心づけ、かたじけない。この地へ来ては、御坊のはうが今度は、わしの兄貴ちや」

「それもこれも、やがてお身に、當寺の大檀那になつてもらひたさの老婆心ぢやて」

「またしても、埒もなき戯れをいふよ」

しかし、利隆、日蓮兄弟の溫情は、しかと庄五郎の胸にこたへてゐる。彼にどういふ見どころがあつて、兄弟はかくも親切をつくすのか。後年庄五郎の道三は、日蓮の恩に報いるために、常在寺を新しく修造し、數ヶ所の莊園を寄進した。

日蓮が警告したやうに、守護や守護代にたいする庄五郎の目見得は、さんさんの不首尾にをはつた。ことに守護の政頼にとつては、庄五郎が初めから蟲が好かなかつた。

「豊後（利隆）がとりもつてよこした、庄五郎とか申すあの油賣りは何ぢや。見るからに奸佞邪智の曲者と思はれる。山崎屋の富をもつて、豊後めをうまうま、籠絡しをつたのであらうが、我は瞞されぬ。今後、目通りはかなはぬと申せ」

政頼が庄五郎にあびせた罵詈には、いくぶんの眞實があつたかも知れない。庄五郎は素手で、美濃にのりこんできたのではなかつた。彼の背後には、山崎屋や奈良屋の富があつた。燈油の一手販賣權をにぎつてゐるかぎり、必要な資金にことかくことはない。

亂世といつても、やはり金の世の中だ。傲慢をもつて一世に鳴つた將軍義満さへ、金ほしさに明王に臣事するやうな、書翰をおくつたではないか。庄五郎が財力を背景にしてゐることは、大きな強味になつても弱味にはならぬ。むしろ彼は他日の雄飛にそなへるために、豪商へ婿入りして三十すぎまで、營々と金を蓄へてきたと云へないこともない。

革手の守護の府城から、寺へ歸つてきた庄五郎が、日蓮に目通りの不首尾をつたへると、數日して利隆から呼出しがあつた。早速伺候した庄五郎を迎へて、利隆が笑ひながら云つた。

「せつかくの目見得も、不首尾にをはつたさうで、氣の毒であつた。其許にかかはりのない、家中の飛ばつちりをうけて、さぞ迷惑したことであらう。それといふのも、まだ其許の身元が、商人とも武士とも定まらぬによる。不足でもあらうが、この我に仕へる志はござらぬか」

利隆は笑ひを收めて、庄五郎の顔をじつと見る。言葉づ